

平安女性叙事文学の誕生を考える

チョウ リンウマイ
張 龍妹

一. はじめに

中国の古代にも才女が輩出し、多くの詩作が残されている。しかし、散文体の著作に関して、後漢の班昭（45?-117?）が『漢書』を完成させていることや『女誡』を著していることから考えると、散文で表現することもできたはずであるが、班昭には文学作品としての散文が残っていない。文学史的には清代汪端（1793-1838）の通俗小説『元明佚史』が最初の作品で、そして20世紀に入るまでには、顧太清（1799-1876）の『紅樓夢影』と陳義臣（1873-1890）の『謫仙樓』というわずか三部の作品しかない^①。1911年に創刊された最初の婦人雑誌『婦女時報』の第一任編集主任を任じた包天笑が、その創刊の目的についてこのように語っている

……惟女子在旧文学中、能写詩詞者甚多、此輩女子、大都淵源于家学。故投稿中の写詩詞者頗多、雖『婦女時報』中亦有詩詞一欄、但不過聊備一体而已。辦『婦女時報』的宗旨、自然想開發她們一点新知識、激勵她們一点新學問、不儘以詩詞見長^②

旧文学の中で、詩詞に堪能な女性が甚だ多く、それはほとんど家学に由来するもので、したがって、投稿の中にも、詩詞の投稿が多い。『婦女時報』にも詩詞の欄を設けてはいるが、ただ、一体を備えるに過ぎない。『婦女時報』創刊の趣旨は、女性たちが惟単に詩詞に堪能するのではなく、自然に彼女たちのために新しい知識を開発し、新しい学問を勤めるためである。ここで明らかに詩詞を旧文学と位置づけし、そして、新知識新学問の代表として小説創作が奨励されている。ということは、中国における女性による小説創作は新旧文学の

交代を意味するようなものである。

日記伝記類についても似たような状況である。『史記』に見える司馬遷の自伝体「後記」が初見と思われるが、単独作品として現存する中国の最初の日記作品は唐李翱の『來南錄』である^③。すでに多く論じられているように、日記の記述の対象は事件・歴史などで公的要素がつよく、公的世界とかかわりをもたない中国古代の女性が日記をすることはほとんど不可能なことである。現存最古の女性の自伝体の作品は南宋の李清照（1084-1155）の「金石録後序」である。『金石録』はその夫趙明誠の遺作で、李清照はそれを完成させ、そして「後序」で家庭生活も含めながら成立経緯を二千字程度でまとめている。この「金石録後序」を除いて、自伝的な文面は清の邱心如（1805?-1873?）の『筆生花』（1857年刊行）に断片的に見出されるのみである^④。

それから、朝鮮半島においても、統一新羅の時代から女性による漢詩の作品が見られ、高麗王朝になると郷歌の伝統を受け継いだ「時調」が作られるようになり、そして、李朝の世宗王の時代にハンゲルの「訓民正音」が作られ、その「訓民正音」の誕生から200年以上経った18世紀の朝鮮後宮に、ようやく『顯仁王后伝』『癸丑日記』『閑中録』といった、女性の手による伝記または自伝作が誕生した。

このように東アジアの文学史において平安朝の女性叙事文学を眺めた場合、平安朝の女性の手による日記、物語、随筆の誕生はまことに奇異で、類例のない現象と思われてならない。今回は以上のような東アジアの視点から、平安朝に女性による日記、物語、随筆を含む散文の叙事文学がどうして誕生することができたのかについて考えてみたい。

二. 女房階層の存在意味

(一) 男性文化圏に活躍する中・朝女性詩人

中国の古典文学史に名を残した女性詩人はおおよそ次の三種類に分類することができる。

1. 后妃または宮女としての宮廷女性
2. 家学の伝統に育まれた淑媛
3. 半ば娼優に落ちぶれた才女

1についてはたとえば西晋の左芬（?-300）であるが、武帝司馬炎がその詩名を聞き、後宮に入れ貴嬪にしたが、「姿陋体羸、常居薄室」（『晋書』）とあるように武帝に寵愛されるようなことはなく、ただ何かの儀式の時に詩作を命ぜられたという。彼女に本来四巻の詩作があるというが、現存するのは2首のみで、その詩作の実態を知ることができない。それから宮女として注目されるのは上官婉兒（664-710）である。彼女は宮廷で生まれた奴隸的な身分の女性であるが、その文才が武則天に認められたため、奴隸の身分を免れ、武則天の「制誥」（詔書）を起草する役割を担当するようになる。中宗李顕在位中は九嬪の一人の「昭容」となり、中宗朝の文学活動にも大きくかかわった。

婉兒常勸広置昭文学士、盛引当朝詞学之臣、数賜遊宴、賦詩唱和。婉兒每代帝及后、長寧安樂公主、数首並作、辞甚絢麗、時人咸諷誦之。

（『旧唐書』）

婉兒勸帝侈大書館、増学士員、引大臣名儒充選。数賜宴賦詩、群臣賡和、婉兒常代帝及后、長寧安樂公主、衆篇並作、而采麗益新。又差第群臣所賦、賜金爵、故朝廷靡然成風。当時属辞者、大抵雖浮靡、然所得皆有可觀、婉兒力也。

（『新唐書』）

旧新唐書にかなり近似したことが記述されている。婉兒は中宗に昭文館の学士を拡充させ、群臣の中から詩賦に堪能な人を選んで遊宴賦詩の文事をたびたび行った。そのときに、彼女自身は中宗、韋后そして長寧・安樂二人の内親王、合わせて四人の代作をする。しかも、その作品は「辞甚絢麗」「采麗益新」と

評され、「時人咸諷誦之」というほどの傑作である。さらに、群臣の作品を次第して金爵を与えたりしたという。婉兒はいかにも当時の文学界の権威たりえていたのである。

2の家学に育まれた女性たちは後宮のような広い舞台に立つことができないが、家族の男性たちとの交流が彼女たちの文学活動の基盤である。先に挙げた左芬も儒学の家のもので、才子左思（250-305）の妹である。左思はその『三都賦』で「洛陽紙貴」のような現象を引き起こした、当代屈指の人物である。現存左芬の二首の詩作のうち、その一首は左思の「悼離贈妹詩」に答えた「感離詩」である。もっとも典型的な事例は、時代はだいぶ下るが、明末の沈宜修（1590-1630）といえよう。彼女は呉江分湖の名門の沈氏の出身で、周りには伯父の沈璟（元曲理論家、作家）、弟沈自昌（雜曲家）、沈自晋（沈璟の甥 伝奇作者）その他計七名の男性文人がいた^⑤。それに、彼女の結婚相手は、文名が沈氏と並び称せられる葉氏出身の葉紹袁（文学者）である。二人の間に五女八男の子供がいるが、中に詩集を残している人が五人もいて、六男の葉燮（1627-1703）が詩論家として後世の詩人に影響を与えている。このように沈宜修の周りには文学サロンができていのように思われる。

朝鮮半島の女性詩人許蘭雪軒（1563-1589）も似たような環境にいたかと想像される。彼女には、父親の許曄、兄の許箴、許筠と弟の許筠といった文名の知られる親族がいた。彼女の詩集『蘭雪軒詩』がその弟から明の使臣に依頼して刊行されていることも、家族の中で彼女の詩才が育まれていたことが推測される。

3の半ば娼優に落ちぶれた才女として、たとえば唐の薛涛、魚玄機のような存在である。薛涛は父親の死のため、魚玄機は妾としての存在も許されなかったため、半ば娼優のような生活を送るようになった。彼女たちは時の文人と交流し、薛涛には元稹、白居易、張籍、王建、劉禹錫、杜牧らと詩文の贈答をしていることが確認される。16世紀の朝鮮王朝の代表的な女性詩人黃真伊も「時調」の舞台で活躍した「妓生」である。

このように三種類に分類したが、三者に共通しているのは、女性詩人たちはともに男性の文化圏に属していることである。それはほかならぬ男性の基準で作品が評価されることを意味するため、^⑥内容も当然男性好みになる。『蘭雪軒詩』がとくにその遊仙諸作が高く評価されたのもそのためであろう。女性詩人の自分たちの文学結社が出来上がるのは、明末清初を待たなければならない。^⑦

(二) 弾詞小説にみえる女主人を中心とした家庭的文学サロン

しかし、文学結社での交流はあくまでも比較的短い詩作の批評に留まる。長編の叙事文学についてはほとんど家族の女性のなかで議論・批評されていた。先に触れた「弾詞小説」^⑧『筆生花』にみえる邱心如の自己語りの箇所以下のような表現を発見することができる。

- | | | |
|---------------|--------------|------------------|
| A. 原也知女子知書誠末事 | 聊博我北堂萱室一時歡 | 第一回 ^⑨ |
| B. 近因阿妹随親返 | 見示新詞引興長 | |
| 始向書囊翻旧作 | 披箋試統剔殘紅 | 第五回 |
| C. 却笑余呆呆作此誠何益 | 聊博取白髮萱白髮關心暫舒 | |
| 年老家貧無以樂 | 姑凭翰墨苦中娛 | |
| 一回唱罷頻催統 | 少不得随意編来信手書 | 第十四回 |
| D. 浪費功夫三十載 | 閑来聊以樂慈親 | 最終回 |
| E. 同胞催我草完篇 | | 第九回結 |

Aでは、女性として書を書くことがまことに「末事」であるが、わずかに母親の一時の歡びを獲得するためにと、創作は母親への孝行であると説明している。邱心如は四回を書き終えたところで結婚し、暫く筆をおいていたが、Bでは、妹が示してくれた新作に共感を覚え、始めて「書囊」の中に旧作を探し出し、統編を書き続いたという。Cでは貧しい家庭生活のなかで楽しいことはなく、「翰墨」で母親を喜ばせることしかできないが、その母親は一回分を唱

い終わると、頻りに続きを催促するので、やむを得ず手に任せて随意に書いてしまうと自己弁解している。Dは最終回の結語部分であるが、三十年間の工夫を費やしたのは母親を楽しませるためだと改めて念を押している。同じ「彈詞小説」の『再生縁』にも「原知此事終無益、只不過暫博慈親笑口開」という作者の語りが見える¹⁰。母親を喜ばせることが二人の創作目的となっているところが注目される。Eでは、妹の催促の故にぞんざいに一篇を終えた旨を語っている。妹と互いに読者と作者の立場で作品を書き進めている。ここでは、母親を中心に、一つの文学サロンができていたことが推測される。

実は17-19世紀にかけて、中国の江南地域で「彈詞小説」が流行り、普通は書場と呼ばれるところへ聞きにいくが、外出できない大家族の女性のためには「女先生」「女先兎」などの芸人が出向いて語ってくれる。『紅樓夢』第五四回に、訪れた二人の女先生が新作の『鳳求鸞』の内容を紹介し、賈母がそれに難点をつけ、批判する場面がある。芸人たちはこのように聴衆の意見を聞き入れて作品の改編を行ったことが推測される。邱心如の家族は賈府のような大家族ではないから、母親と姉妹のなかで批評しあったりして作品を完成させていたものと思われる。

(三) 平安時代における物語創作の現場

ここで思い合わされるのは平安時代における物語創作の現場を伝える記述である。

- a) かくつかさづかさになりてのち、ものがたりのかみうたのすけは、うたづかさこそかくべけれとて、ものがたりのかみうたのすけに
- b) 物語のきよがきさせ給ひてふるきはつかさの人にくばらせたまへば、ものがたりのかみ、みぶのもとにやるとて、

a) は『大齋院前の御集』94・95番歌の詞書である。選子サロンでは歌司・

物語司ができ、女房たちをそれぞれの司に配属させている事情が推測される。

b) は同集 96・97 番歌の詞書である。おそらく物語司で作った作品の清書を終えたので、古くなったものを長く里にいる女房に送っている。このような女房たちの、物語創作へのかかわり方は、後宮サロンにおいても行われていたと推し量られる。

後宮ばかりではない、大貴族の家庭でも似たようなことが行われていた。

c) とのの御前、ものがたりつくらせ給ひて、五月五日あやめ草をてまさぐりにして、けちかうみるをむなへしをとて、……

d) とのには、はなさくらといふものがたりを、人のまゐらせたるつつみかみにかいたる……

c) は『赤染衛門集』136・137 番歌の詞書である。道長が女房たちに物語を作らせ、それについての歌を赤染衛門に求める場面である。d) は同集 166・167 番歌の詞書で、外から「はなさくら」という物語が送られたことが書かれている。大貴族の道長邸でも、女房たちは物語を作り、よそとの交流もしている。

文学結社での交流は多くは詩歌の創作批評にとどまる。有る程度の紙幅を有する散文の創作批評は邱心如の家族のように、生活を共にする家族の中でやっと可能になる。その意味で、女房という制度は、家族の範囲を超えて散文の創作批評を可能にしたのである。

(四) 平安時代における物語の享受

それから、物語が音読で享受されていたことも、物語の創作と大きくかかわっているように思われる。『源氏物語』「東屋」に「絵など取り出でさせて、右近にことば読ませて見たまふに……」と、女房の右近に詞を読ませて中の君自身が絵をみるという、平安時代の物語鑑賞の実態を示す場面である。『紫式部

日記』にも「うちの上の、源氏の物語、人に読ませたまひつつ聞こしめしけるに、『この人は、日本紀をこそ読みたるべけれ。まことに才あるべし』……」と一条天皇が『源氏物語』を女房に読ませて聞き、その作者を評価する記述が見える。音読することで、複数の人の同時享受が可能になる。その点も「彈詞小説」の享受と似通っている。

さらに、以下のような物語合評会も行われていたことが確認される。

- ① ゑんゆう院の御ときにや、うつほのすずしなかただといづれまされりと論じけるに、しのはらはすずしが方にやありけん、女一宮はなかただが方におはしけるにや、いづれをいるるなどあるに、物ないひそとおほせられければ、ともかくもいはでおはしけるをいひにおこせ給うければ、

沖つ波吹上のはまに家ゐして独すずしと思ふべしやは

『公任集』530

- ② 暮れぬれば、まゐりぬ。御前に、人々いと多く、殿上人などさぶらひて、物語の良き悪しき、憎きところなどを、定め、いひ譏る。涼・仲忠などがこと、御前にも、劣り勝りたるほどなど、仰せられける。

『枕草子』新潮 78 段

- ③ 仲忠が童生ひ、いひおとす人と、「郭公、鶯に劣る」といふ人こそ、いとつらう、憎けれ。

同上 209 段

①～③は『宇津保物語』の人物評が後宮で行われていたことを語る資料であるが、このような合評会は女房たちの集まる貴族の屋敷でも行われたことであろう。それが『無名草子』のような物語批評の誕生を促したばかりでなく、また物語創作を刺激していたことが容易に想像できる。

このように、女房階層の存在が物語の創作、享受、批評の各方面とかがわっている。平安時代の叙事文学の誕生がこのような女房階層の存在と緊密な関係にあることは改めて申すまでもないが、中国の明清の江南地域における彈詞小

説の流行背景を視野に入れることで、その特質が一層明らかになったように思われる。

二. 散文で書くことの意味

19世紀の女性がどうして詩歌ではなく小説を書くようになったかということについて、詩歌を作るには表現を吟味する集中力が必要で、19世紀の女性が家庭的な雑用に惑わされ、創作が常に邪魔されるような状況にあったため、詩歌が作れなくなったという見方がある^⑪。清朝の彈詞小説の作者たちについてはまだ通用するが、平安の女性作者になると、まったく事情が異なっていることは明らかである。彼女たちは家庭的な雑用に惑わされていたとは考えられず、それに彼女たち自身も大量の和歌を残しているのである。とくに『蜻蛉日記』の上巻は歌集的な性格を有していながら、散文としての日記でなければならないことの意味は何であるのか。

(一) 韻文と散文の違い

それは、根本的には韻文と散文で記述することの違いにかかわっているように思われる。

詩以道志、書以道事。 『莊子・天下篇』

詩言是其志也、書言是其事也。 『荀子・勅儒篇』

とあるように、中国では、詩は志を言うもので、散文は事を述べるものである。陳寅恪氏はその『元白詩証稿』において、『長恨歌伝』と『長恨歌』について論じ、『伝』は事実を述べ、『歌』は感情を述べると指摘し、あわせて『鶯鶯伝』と『会真詩』の関係を指摘した^⑫。

そればかりでなく、中国の伝奇・志怪小説の類も、その創作の基本姿勢は事実を記録することにあると考えられる。一例として、王汝濤編校の『全唐小

説』の目録を見てみよう。

伝奇：古鏡記 補江総白猿伝 遊仙窟 高力士外伝 離魂記 枕中記 任氏
伝 異夢録 崔少玄（人名）……50篇 記：6篇 伝：20篇
録：4篇 人名：11篇

人名だけの各篇も「伝」と同等に考えてよろしいのであり、50篇のうち、計41篇も題目から事実の記録であることを標榜している。

志怪：合計21部 記6 録5 志4 外伝1

21部のうち16部が記録を意味する書名を有する。そのほかの5部は「紀聞逸史 甘澤謡 酉陽雜俎 伝奇」といったもので、同じように事実の記録性を強調するような書名である。

具体的な表現においても、たとえば、「離魂記」の結びに、「玄祐少嘗聞此説多異同、或謂其虚。大歴末、遇萊蕪県令張仲規、因備述其本末。鑑則仲規堂叔、而説極備悉、故記之。」など見聞者の語りの記述という方法を取っている。『甘澤謡』に有名な「紅線」という一篇があり、結びに送別の詩が作られているが、『唐詩紀事』の記述とも一致している。

日記の最初の作品として、唐の李翱『来南録』「元和三年（808）十月、受嶺南上書公之命、四年正月己丑自旌善第以妻子止船於漕……」という千字程度のものである。それもあくまでも事実を記録することに留まっていた。

唐代の伝奇小説に心理描写が見えないことが常に指摘されるが、それもまさに事実の記録という性格のしからしめるものであると考えられる。

（二）朝鮮王朝女性日記の性格

朝鮮王朝の日記はどうであろうか。『癸丑日記』は1613～18年に発生した

仁穆大妃幽閉事件の記録である。

- ①(侍女) ……今死んで、後世に大妃さまのお名前が汚されたまま伝わることは、深く憂慮すべきことではございませんか……
- (大妃) わたしだって、どうしてそんな道理がわからないことがあるう。汚れた名をすすごうとしないのも、悲しみで心がちぎれ、骨が碎かれるようで、……

自殺しようとする大妃に対する侍女の慰めの言葉と大妃の答えである。汚れた名をすすぐことが日記の目的であることは言うまでもない。したがって、作品の中では、

- ②癸丑の年 (1613) から経験した悲しいこと、いつも宦官がやって来て邪魔立てをし、叱りつけたこと、虐待不道、不孝のことどもをすべて書き付けることはとてもできず、その万分の一だけでもと記録した。
- ③すべてを書き付けようとすれば、南山の竹全部を切り尽くすのと同じこと、どうしてなしえよう。すべてを語ろうとすれば、一つの天地が尽き、後の天地が興るだけの物語を語ることになる。以上は内人たちがほんの少し記録しておいたまでのこと。

とあるように、記録であることが繰り返し強調されている。

それから、『閑中録』は1762年の思悼世子の「廢世餓死事件」の経験者、世子嬪洪氏の作である。その創作の動機について、以下の④と⑤のように語っている。

- ④壬午の年 (1762) の禍変というのは未だかつてなかった変事であって、先王が丙申の年 (1776) の初めに英廟に上疏して、

「承政院日記をなかつたものにいたします」

とおっしゃって、その記録を削除することになったが、それは先王の父親への孝心から、当時このことが衆人の眼に触れないものでもなく、その無礼であることを悲しまれたのであった。それから時が流れ、事蹟を知るものがなくなり、その間に利を貪って、禍を好む者たちが事実をねじまげて、輿論を眩惑させようと考え、……(中略)……わたくしがやがていなくなれば、宮中には知る人が誰一人いなくなって、一切がわからなくなり、子孫として祖先の大事についてなにひとつ知らないようではわびしくもあり、一度、その前後の事を記録して、主上にご覧に入れてから、死んでいこうと思って、……

- ⑤他の人たちがあの年のことをああだこうだといっているのは、すべてが孟浪無稽の説というべきで、この私の書き記したのを見れば、あの年の事の始終がはっきりわかるだろう。

『恨のものがたり』梅山秀幸訳編 総和社 2001年

下線部のように、宮廷の『承政院日記』にかわるものとして記録した意図が明らかである。そのような作者の意図が実って、純祖親政後の1804年に、弟洪楽任が官職に復帰し、父洪鳳漢も無罪が言い渡され、更に作者が他界する前に、洪鳳漢の上奏稿が『奏稟』として刊行されるようになっている¹³⁾。その日記が事実の記録として、家族の冤罪を雪ぐことに欠く事のできない役割を果たしていることは多言を要しない。

(三) 『蜻蛉日記』の執筆意図

『蜻蛉日記』の執筆意図を考えるとときによく引用されるのは『宇津保物語』の以下の一段である。

大将は「家の記・集のやうなる物に侍る。俊蔭の朝臣、唐に渡りける日よ

り、父の日記せし一つ、母が和歌ども一つ、世を去り侍りける日まで、日づけしなどして書いて侍りけると、俊蔭、帰りまうで来るまで作れる詩ども、その人の日記などなむ、その中に侍りし。それを見給ふるなむ、いみじうかなしう侍る」など奏し給ふ。 『宇津保物語』「蔵開上」

俊蔭が唐に渡る日から辞世するまで、その父の日記と母の歌が、日付をして書き綴られてあったという。ここにおける俊蔭の父親の日記を登場させることの意味は、結局のところ、虚構の物語において俊蔭渡唐に事実性をもたせていることにほかならないのである。

それから、『蜻蛉日記』の冒頭であるが、

かくありし時過ぎて、世の中いともものはなく、とにもかくにもつかで、世に経る人ありけり。かたちとても人に似ず、心魂もあるにもあらで、かうものの要にもあらであるも、ことわりと思ひつつ、ただ臥し起き明かし暮らすまに、世の中多かる古物語のはしなどを見れば、世に多かるそらごとだにあり、人にもあらぬ身の上まで書き日記して、めづらしきさまにもありなむ、天下の人の品高きやと問はむためしにもせよかし、とおほゆるも、過ぎにし年月ごろのこともおほつかなかりければ、さてもありぬべきことなむ多かりける。 『蜻蛉日記』上巻 冒頭

その執筆意図を語る箇所である。作者は明らかに自分の書く「日記」を「古物語」に対置し、「そらごと」である古物語を否定したうえで、「人にもあらぬ」自分の「身の上」を書き日記することによって、「天下の人の品高きやと問はむためしにもせよかし」と表現している。実体験としての身の上についての記録を宣言していることは明らかである。貫之は女性に仮託し『土佐日記』を執筆したが、道綱母はむしろ正道としての日記を書き綴ったのである。女流日記はその虚構性がイコール文学性であるように言われるが、しかし、その執

筆の意図はむしろ事実の記録にあったのではないかと思われる。

三. 自意識と女性教育

(一) 主家賛美の相違

『仁顯王后伝』は肅宗継妃閔氏の廃立をめぐる、その近侍が記録した作品である。閔氏はその母親が不思議な夢を見て懐妊された子で、誕生の時は屋敷の上に瑞気が上り、産屋に香気が立ち込めたという。成長するに及んで、「妊婦の徳行ある」「いにしへの中国の太妊、太姒と異なることはな」く、「聖徳」を備えた「聖人」であるなどと、記述者は主家賛美に徹底している。

しかし同じ公的女房日記として、『紫式部日記』は大きく異なっている。

行幸近くなりぬとて、殿のうちを、いよいよつくりみがかせたまふ。(中略) なぞや、まして、思ふことすこしものめなる身ならましかば、すぎぎしくももてなしわかやぎて、常なき世をもすぐしてまし、めでたきこと、おもしろきことを、見聞くにつけても、ただ思ひかけたりし心の、ひくかたのみつよくて、もの憂く、嘆かしきことのまさるぞ、いとくるしき。
…… 『紫式部日記』

『紫式部日記』は彰子出産をめぐる公的な記録であることはすでに定説となっているが、引用した箇所「なぞや」から始まる部分は、紫式部の心象を吐露した叙述として注目されてきた。

(二) 嫉妬感情の相違

それから、『蜻蛉日記』における道綱母の町小路女に対する赤裸々な嫉妬は、改めて引用することもないが、『閑中録』の作者は夫の女性事件について、以下のように自分の心境を述べている。

①(良嬪の出産) わたくしが立ち回らなければ難しい事態になっていたために、どんな知識があるというわけではなかったが、力の及ぶかぎりお世話をした。 『閑中録』

②(ピンエ事件) 「どうして夫のすることをとやかく申せましょうか。わたくしの道理として、そのようなことはできなかったのです」 『閑中録』

舅である英祖という絶対的な庇護者がいるにもかかわらず、彼女は夫の女性事件に際しては、嫉妬しないことを極力に守り、そのために却って英祖から叱られるにしても、自分の行動指針を守り通したのである。

(三) 朝鮮王朝女性日記に見える天理天道の希求

朝鮮王朝の日記にもう一つ注目されるのは、天理や天道に対する訴えである。とくに『閑中録』に集中するが、

○天に向かって泣き叫んだ。

○この赤心の情熱は鬼神だけが知るところであって、他の誰が知りえよう。

○天地もまさに光を変じたかのようで、

○天に叫んで、慟哭して、命数を恨むまでのことである。

○天よ、天よ、わたくしを生き存えさせて、わが弟の恨みが雪がれるのをこの目で見ても、死なせてくださるよう、昼夜に血の涙を流して、祈るばかりである。

○ああ、万古にこうした世道とこうした天理がどこにあるというのか。血を吐きつつ、一死をわきまえないおのれを恨みとするだけである。

『閑中録』

文字通り枚挙に暇がないが、そのような表現が頻出するのは、儒教でいう三綱五倫にしたがって行動を徹すれば、天理天道が守ってくれるはずと作者は信

じ込んでいることの現われであろう。たとえば、良嬪の件で英祖から叱りを受けたとき、彼女は「昔から、嫉妬は七去の罪の一つであり、婦女の妬忌しないことを最上の徳としているのに、私はかえって妬忌しないことをとがめられてしまった。これもわたくしの運数であったのだろう」と諦観しているかのようであるが、以降も変わることなく自己を厳しく律するのである。天理天道の存在を信じ、諦めながらも諦めと対峙しようとする執念が日記となって結実されていると思われる。そして、儒教道徳の体現そのものが、作者にとっては、いかに自我を抹消し、忠孝に徹底するかということであった。

(四) 女性教育の相違

日本と朝鮮王朝の日記文学にこのような大きな違いがあるのは、主として女子教育に由来するのではないと思われる。

平安貴族女性の教養を語る資料としてよく引用される箇所であるが、

「ひとつには御手をならひ給へ。つぎには琴の御琴を、人よりことにひきまさらんとおぼえ。さては古今の歌二十巻をみなうかべさせ給ふを御学問にはせさせ給へ」
『枕草子』「清涼殿の丑寅のすみ」

同じ記述が『大鏡』にも見えるし、『源氏物語』に見える女子教育の実態とも一致することから、貴族社会の常識と考えてよろしかろう。ここでとくに注目したいのは、習字、琴の琴そして和歌の習得といった教育内容はすべて男性との交渉を目的とするものである。

ところが、朝鮮王朝の日記には以下のような記述が見える。

文筆にありあまる才能をお持ちで、万古歴代のものに知らず、通ぜずということがなかったが、だからといって、もっともらしく取り澄まして筆を執って文章を書くということはなさらなかった。 『仁顯王后伝』

女聖人の仁顕王后は文筆の才能を持っていながら、絶対にそれを見せびらかに文章を書くようなことはしないという。

『閑中録』に、作者の母親について以下のような記述がある。

お母さまはみずからそうして夜を徹して仕事するのを、老若の僕たちが見て気を遣わないようにおもんばり、窓に黒い布をかけておいて、ひとびとが称賛することを避け、苦勞を隠そうとなさった。 『閑中録』

宰相の娘という高貴な出身であるにもかかわらず、自ら裁縫、洗濯といった手仕事をし、夜を明かすようなことがあった場合は、下僕たちが気兼ねすることないように、窓に黒い布をかけて内証にしたという。

そして、作者が世子嬪に選ばれたことが確定した段階に、英祖から『小学』を送りますから、お父さまに教えてもらって、十分に気持ちの準備をしてから、やってきなさい」と言われた。その翌日に『小学』が作者のもとに届き、あわせて孝純王后御製の「教訓の書物」も届いた。『小学』は児童に儒教道德の基本を教え込むことを目的とする書物で、卷二「明倫」は君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の交などを論ずる巻であり、中に「男不言内、女不言外」という男女の違いについての名言がある。

平安の貴族女性は、その教育の一環として、和歌や音楽を通して自己を表現することが求められ、それが必然的に自意識の形成へと結びついたものと考えられる。日記や物語はそのような抑制できない自意識の現れと言ってよいであろう。

このように比較してみると、朝鮮王朝の女性と同じく自意識の抹消を自らの日課とする中国古代の女性が、平安朝の仮名日記のような作品を残さなかったのも、むしろ当然であるように思われる。少なくとも、嫉妬感情のような儒教道德と相容れないものを、呪詛などのような形で表現するにしても、文章にし

て表現することはできなかったのである。

[注]

- ①薛海燕 「論中国女性小説的起步」『東方叢刊』2000年第1号
- ②戈公振 『中国報学史』上海古籍出版社 2003年 p.165
- ③胡曉真 『才女徹夜未眠』北京大学出版社 2008年 p.81
- ④胡曉真 前掲書 p.81
- ⑤乾隆年間に刊行された『吳江沈氏詩集録』には一門の九一名の詩人の千篇に及ぶ詩作が集められている。
- ⑥上官婉児が群臣の詩作を評価するような異例があるにしても、結局彼女の評価自体がまた史書で男性によって再評価されることになっている。
- ⑦Ellen Widmer 劉裘蒂訳「十七世紀中国才女の書信世界」『中外文学』第22巻第6期
- ⑧曲芸の一つで、三弦か琵琶の伴奏で物語を語り、17-19世紀にかけて主として江南で流行した。
- ⑨『筆生花』の引用は中州古籍出版社1984年による。
- ⑩『再生縁』の引用は中州古籍出版社1982年による。
- ⑪たとえば Virginia Woolf A Room of One's Own (San Diego: HBJ 1929) p.69-70
- ⑫上海古籍出版社 1978年 第一章。
- ⑬李美淑、朝鮮王朝の宮廷文学の史実と虚構——『ハン中録』を中心に、(仁平道明編、『王朝文学と東アジアの宮廷文学』所収)、竹林舎、2008年5月、p.548

[付記]

本研究は北京外国語大学 2009年度基本科研専項経費項目“2009JJ045”の研究成果の一部である。

* 討議要旨

今関敏子氏は、日本文学史の中で、南北朝時代の『竹むきが記』成立以来、樋口一葉まで約500年間、女性作者がいないという空白期があったことについて、どう考えるかと質問し、発表者は、逆に女性作者が存在する理由について、平安期に「女房」という階層が存在したこと、当時の女子教育に必須の和歌を詠む行為が恋愛や結婚に結びつくという社会的背景、とくに、女訓書類の受容などと密接に関わっているのではないかと答えた。王益鳴氏は、北朝の前秦の詩人である蘇慧の方が、今発表で指摘された女性文学者以前の女性作者として提示できるのではないかと問い、発表者は、本発表は散文体の叙事文学の誕生を考えるものであるため、詩は対象外であると述べた。